※文字の大きさは MS ゴシック ／12 ポイント以上とし，行間･文字間，上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図，写真，表，グラフなどは，適宜文章中に挿入してください。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
※いずれの場合も，必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

※事務局記入欄
No.035

【様式２】

エントリー名：横須賀市立長沢中学校・藤井亮平

活動名：「生徒」を主語にした学校づくり～NGSW プロジェクトで生徒活躍型の沢中へ～

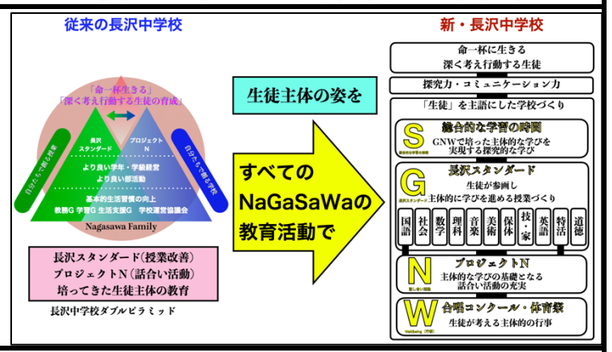
解決すべき課題：長沢中のすべての教育活動で生徒活躍型を目指す！

学校教育目標「命一杯に生きる」の具現化を目指し，授業改善「長沢スタンダード」と話合い活動「プロジェクトＮ」を通じて，『生徒』が活躍する学校へと成長した。特に，長沢スタンダードでは教科リーダーが授業を進めるスタイルであり，生徒に活動を委ねたことで，生徒自身が当事者意識を持って取り組むことができるようになった。しかし，研究を進めてきたものの，教師の異動もあり形骸化が進み，次のような課題を解決することでさらに発展した長沢中を目指す。

① 学年ごとに取り組む内容が異なり，連携が薄い
② すべての教育活動で，生徒主体の活動になっていない
③ 教師も生徒も全ての活動で PDDA サイクルが確立されていないため，好循環が生まれない

目標・方針：プロジェクトの立ち上げ！

「学校教育目標」に向かうためのプロジェクトＮ・Ｇ・Ｓ・Ｗを立ち上げた。学校全体の意識改革を図るため，従来の長沢中学校の教育活動を「学校教育目標」「目指す生徒像」を達成するためのプロジェクトに整理し，教師が生徒主体の「『生徒』を主語にした学校」を運営していく。また，学年を超えて，プロジェクトを評価・改善し好循環へ繋げていく。



活動内容：「生徒」を主語にした学校にするために

①「命一杯に生きる～深く考え行動する生徒～」とは？

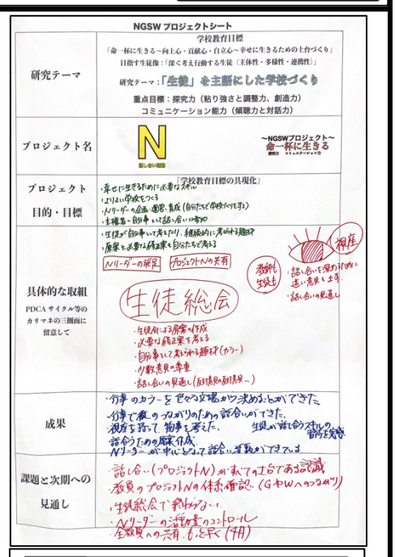
目標の最上位である学校教育目標を達成した姿を教師一人ひとりが説明できるようにするために，「命一杯に生きる？」「主体性とは？」など，抽象的な言葉を目指す姿を描きながら具体的な言葉で共通理解することを目的とした研修を行う。また，目標達成のための計画や具体的な取組について，プロジェクトごとに設定し，実施計画を作成する。

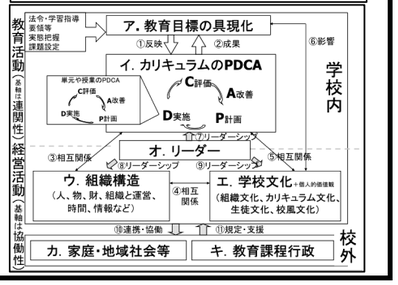
②校務分掌の整理

生徒活躍型に直結する NGSW プロジェクトを具体的に取り組むために，既存の校務分掌をスリム化し，全教師が NGSW プロジェクトのいずれかに，必ず属すように校務分掌を整理した。各プロジェクトのリーダーを中心に，メンバーとともに NGSW プロジェクトシートを用いて，学校教育目標から逆算した各プロジェクトの目的や具体的な取組内容を決めていく。また，「成果」や「次期への見通し」も明記し，評価する。

③各プロジェクトの PDCA

カリキュラムマネジメント・モデル図（田村知子『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』，ぎょうせい，2016 年）を参考に，各プロジェクトが４ヶ月に一度，取組内容について PDCA を行う。様々な視点（学校教育目標や組織構造，外部資源など）から現在までの成果と課題を分析し，次の４ヶ月に繋げていくために，プロジェクトシートの加筆修正を行う。





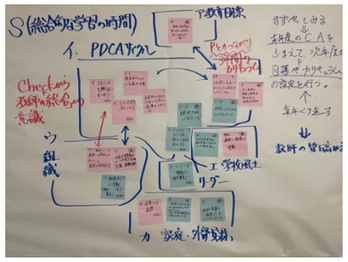
取組の過程：「生徒」を主語にするための取組

①「主体性」を具体的な姿に

「命一杯に生きる姿」→「主体的な姿」に加えて，今年度の重点目標である「探究力」「コミュニケーション力」を発揮している姿とは何か，この姿を具体的なものにしていくために，ブレーンストーミングを用いて，学年ごとに意見を出し合った。また，その具体的な生徒の姿を目指すために，教師の関わり方の改善や既存の教育活動の具体的な改革について話し合った。

②校務分掌の整理→生徒組織の整理

校務分掌の整理により，NGSW の各プロジェクトが結成された。各々がプロジェクトシートを用いて具体的な取組を考えていく中で，生徒の組織を編成する必要性が出てきた。そのため，既存のＮリーダー・Ｇリーダーに加え，Ｓリーダーや W リーダーが生徒の中に組織され，教師とプロジェクトの目的を共有し，生徒が自ら行事の要項を作成した。生徒は自分たちで作成した要項を全校生徒に伝え，自らの力で行事を開催した。



③生徒も教師も NGSW プロジェクトシートで PDCA サイクル

各プロジェクトが「生徒」を主語にした学校づくりのために教育活動に取り組んだ。しかし，その過程では教師の疑問や生徒の戸惑いも生じた。そのため，既存の職員会議やグループ会議を短縮し，プロジェクト会議の時間をつくり，疑問点の解消や生徒が活躍する教育活動にするための方法を全職員で考えた。カリキュラムマネジメント・モデル図を参考にプロジェクトを振り返り，「Check」「Action」ができていないことに気づいた。研究授業や話合い活動などのプロジェクトが終了したら，生徒にも振り返りと改善点について話合う活動を取り入れ，教師も含め次期へ向けた取組を策定していく。また，外部機関や学校組織など，様々な要因から課題を解決する方法を見つけ出し，プロジェクトシートに加筆した。さらに，プロジェクトＷの生徒は，合唱コンクールと体育祭の要項の目的が異なっていたことに気づき，合唱コンクールと体育祭の要項の目的を「生徒一人ひとりが活躍する行事」に統一した。

活動の成果：教師の意識改革が生徒活躍型の学校づくりに繋がる

①「生徒活躍型」の学校になってきていることを生徒も実感！

生徒を対象にした「『生徒』が主語になる学校になっているか」を問うアンケートでは，肯定的な回答が 92%以上であり，これまで取り組んできた長沢スタンダードやプロジェクト N に加えて，行事や総合的な学習の時間でも生徒活躍型の教育活動になってきていることがいえる。

②無解答率が大幅に減少！NGSW プロジェクトの相乗効果！

以前の長沢中学校の生徒は，わからないことや課題に直面すると，目を背けることが多くあったが，学力学習状況調査の結果では全国と比べ，平均で４％以上，無解答率が低いことが示された。長沢スタンダードの継続はもちろんのこと，教育活動全体で「生徒活躍型」を目指したことによって，自分たちで課題を解決する力を身につけることができたと上記の結果からいえる。また，様々な困難にも当事者意識を持って取り組むことができた結果と考えることができる。

③教師間の対話が増加！従来の会議を改革！好循環に繋がる PDCA を確立！

今までは長沢スタンダードとプロジェクトＮの２本柱だったが，すべての教育活動で新たな取組を始めたことで，教師が様々な疑問や意見をもつようになった。また，生徒も自分たちで責任を持って行動することが多くなり，戸惑いや困難なことも出てきた。これらを解決するために教師間の対話が必要になり，既存の会議を短縮し，プロジェクトシートやカリマネモデル図を用いて，改善策を考える時間を設定し，実践と改善を繰り返しながらプロジェクトを一歩ずつ進めた。